CHIKUGO RIVER HERITAGE　KURUME

筑後川遺産

【登録第１号】

城島酒蔵ものがたり

「酒仕込み」版画　一木軍盛（筑後城島の四季）より

城島酒蔵ものがたり

筑後川遺産とは

久留米市内には、悠久なる大河「筑後川」の恩恵に育まれた歴史遺産（文化財）が数多く広がっており、それぞれの遺産に歴史や文化を背景とする物語があります。

その様々な物語でつながれた歴史遺産の関連が「筑後川遺産」です。市民と市が連携して歴史遺産を見つけ、守り、活かし伝えていくため、令和３年度に筑後川遺産登録制度がスタートしました。

１「城島酒蔵ものがたり」メインストーリー

城島の酒は「東の灘、西の城島」と称されていました。城島の酒とは、福岡県酒造組合旧城島支部で醸造された酒をいいます。**筑紫平野の良質な米と豊かな水**に恵まれた城島の酒造りは江戸時代に始まりますが、当時の酒造りは酒株を持った酒屋に限られていました。

明治時代になると、酒造技術と資本のあるものは誰でも酒造りが出来るようになり、城島にも**多くの酒造業者**が現れます。明治・大正時代に経営を軌道にのせ、財力を得た蔵元の多くは、地域のインフラ整備や人材育成にその財を使いました。

酒造りの発展が、城島の地域産業（農業、瓦造、木工業）や文化芸術を育て、**城島のまちづくり**につながりました。今でも見事な甍の**酒蔵や酒造り関係の産業遺産**が多く残されています。

山ノ井川沿いにあった有薫酒造第２蔵。水取船が横づけされていました。

有薫第２蔵（一木軍盛版画）

筑後川遺産「城島酒蔵ものがたり」（ストーリーの概要）

筑後川の水 筑後平野の米 → 城島の酒 → まちづくり → 歴史遺産

２ 酒造りのはじまりと品質向上への道（暖地軟水仕込みの開発）

城島の酒造りは、江戸時代の延享２年（1745）に富安栄重、文政12年（1829）に江頭太右衛門、嘉永３年（1850）に首藤重之進、文久３年（1863）に中村正助らによって始まりますが、当時の酒造りは藩による規制が多くその量は限られていました。明治時代になると、酒造りは比較的自由に行えるようになり、増産された酒は、筑後川を経て長崎・熊本方面にも出荷されるようになりました。

明治10年（1877）、西南戦争の好景気によって造酒量は約４倍に増加しますが、戦後不況によって酒の需要は激減し、廃業する蔵が相次ぎます。不況を脱するため蔵元は、新たな販路を求めて長崎や関東に視察に向かいます。ところが、当地に流通していた兵庫県灘や大阪府堺の酒に比べ、城島の酒は品質の点で及ばず、改良の必要性を痛感します。

蔵元は、灘から杜氏を招き品質向上に取り組みますが、うまくいきません。それでも、蔵元や杜氏達は研究を続け、明治20年代前半に水質や気温に問題があることを発見し、新たな醸造法を確立しました（暖地軟水仕込法）。その結果、酒の品質は飛躍的に向上していきました。

暖地軟水仕込法の開発に尽力した蒲池源蔵（池亀銀蔵者）の功績を称えた碑が池亀酒造南の竜宝酒造敷地にたてられています。

蒲池源蔵翁頌德碑

筑後川の豊かな水と
筑紫平野の実り

筑後川の豊かな水と肥沃な大地の実りを元に城島の酒は醸されます。かつて酒の仕込み水は、「アオ」と呼ばれる筑後川の川水が用いられていました。

３ 東の灘　西の城島

城島の酒は、暖地軟水仕込の確立や三潴酒造研究所の設立によって品質向上へ取り組んだ結果、全国清酒品評会で受賞するなど酒造業界で確固たる地位を築いていきました。造酒量も増加し、灘地域に次ぐ全国２位の実績を誇るようになります。ここにいたって城島の酒の名声は全国に轟き、「東の灘、西の城島」と称されるようになっていきます。

かつて、城島町青木に所在した「清波醸造」醸造元江頭本店の亀徽図です。筑後川に面し、蔵の直ぐ近くに大川軌道が走っている状況が見てとれます。城島の酒蔵の多くは輸送の便を考慮した川沿いに位置し、しかも鉄道停車場を近隣に配置して酒を輸送しやすい環境を作っています。

清波醸造元江頭本店　（久留米市教育委員会蔵）

４. 酒蔵と町の発展

財力をつけた蔵元は地域産業の発展にも寄与していきます。酒を九州各地や海外に搬送するための港湾（江島港・若津港）や、大川軌道などの交通インフラ整備を行い、安定した水の確保のため、城島簡易水道協同組合を設立し水道事業にも着手しました。また、鐘ヶ江銀行（後の三潴銀行）を設立し、金融の安定と発展にも貢献しています。各社の株主や設立者には蔵元達が名を連ね、経営に関わっていました。人材育成にも力を入れていた蔵元は、三潴中学校（現三潴高等学校）の誘致・設立に深く関わり、高校通りや城島新町を整備するなど、学校周辺の環境整備にも力を尽くしました。

ほかにも、酒米の確保を目的とした農業経営、桶や樽等の木工業、酒蔵を覆う屋根瓦（城島瓦）など、酒蔵の発展が地域経済を活性化し、城島の町並みを形作っていきました。

酒蔵は、芸術家との交流も育みました。画家の青木繁や詩人の若山牧水など、多くの芸術家が酒蔵を訪れました。美術品の収集も行い、その一部は、大川市立清方美術館（旧清方酒造）で公開されています。筑後酒造り唄等の民謡や城島天満宮の祈醸祭（子供神輿・舞奉納）、松尾神社の酒造り安全祈願祭などの伝統行事、うなぎやエツ料理等の食文化など、酒造りが育んだ文化が各地に見受けられます。

城島天満宮の祈醸祭でかつて行われていた子供神輿

入道渕橋の酒造りオブジェ